

夏のとあるキャンプ場での出来事

加藤 進

長期休暇になると我家が毎年訪れるそのキャンプ場は、設備こそ最低限ではあるが山全体が広大な敷地のフリーサイトで、予約不要、出入時間自由、そして何よりも信州の絶景ともいえる山々と高原の空気を満喫できるいわば穴場的な場所でもある。

ここは規約が少ないというのに炊事場やトイレなど利用者のマナーがよい。規約がうるさいキャンプ場よりもきれいであるといっても過言ではない。そして木立ちや山の傾斜などを上手に利用し、何となくお互いがプライバシーを守ることに徹底しているところも好きな理由の1つでもある。

数年前、今回も私たち家族・義父・義母と共にお盆休みを利用し3泊4日の予定でそこを訪れた。こちらの両親もキャンプ歴40年以上のかんりのベテランで、設営・料理・撤収などキャンプ生活のすべてにおいて完璧なキャンプの達人夫婦である。とはいえ還暦を過ぎた両親をキャンプで働かせる訳にもいかないので、一緒にキャンプをする際には、スケジュールの調整から始まり、食事の献立、食材の調達、調理、テントの設営、撤収まですべて私がサポートしていくのが毎年の我家の恒例行事なのである。

夕食時、いつものようにランタンに火を灯し食事の支度をしていると一台の軽自動車が私たちのキャラバンの前を横切り、数メートル先に停車した。

「あれっ？知り合いかな？」と思い見てみると、車から降りてきたのは全く面識のないおそらく20代の若いカップル。

「おおい、こんなに広いのにそこにテントを張るつもりか？」と思ったが、ここは公共の場。「そこはやめてくれませんか？」とは言えない。私たちもただのキャンプ場利用者の一人。そんな権限はない。

言うまでもないがココは人気（ひとけ）のない山奥のキャンプ場。広大な土地に現在おそらく数十名しかいないだろう。このキャンプ場の利用者は開放感を求めにここにたどりつくようなもの。

電車で例えるならば、数名しかいない車両なのに真隣の座席に座られるような感じ・・・

「いやだなあ～。でもお盆だからしょうがないかなあ～」などとあきらめ、しかたなく夕食作りに専念していた。

それから1時間近く経過し夕食もできあがり、「さあ、かんぱ～い！」などと叫んでいると、母が突然

「進ちゃん、ほらっ出番よっ！！」

私は訳が分からず、

私「？・・・」

「何ですか？」

母が私の背後を指差し、少し慌てた表情で声を掛けてくる。

母「あの人たち何か困っているみたいよ・・・」

振り返ると先程のカップルの男性の方が何か説明書のような物を見ながら、テントらしきものの袋のジッパーを開け、携帯電話で延々と話をしていた。会話までは聞き取れなかったが、おそらくテントの基礎知識はあるが、これは借り物なので持ち主に簡単な設営方法や注意事項などの相談をしていると私は推測した。

私「初心者ですかねえ～」

しかし最近では「山ガール」などといった軽量・単純装備で山で一泊過ごすといった若者も増えていることも事実。たぶんそうなのかな？と思ってしばらく見ていたが何だか様子がおかしい。違った。。。

気になったのでタープの外に出てみると。電話での会話が聞こえてきた。

男「ポール？ポールってこの鉄の棒みたいなものですよね～」

「色？色はわかんないっすね～」

そう話す若者の横では彼女が必死に携帯電話のカメラ機能に備わっているフラッシュライトをかざしながら、

女「あっ、これは黄色。んんっ～こっちはあ～・・・あっ青っ！ あったよ～青っ！！」

私「・・・(-_-)」

ここは山奥、辺りは真っ暗、明かりはケータイのみ、到着からもう2時間経過、もう夜・・・何も出来てナイ・・・出来る気配もナイ。。。

さらにここは標高1200mの山中。真夏でも夜になると気温は10℃近くまで下がる。我々は既にフリースやダウンを着込んでいるのに、彼らは半袖に短パン姿。彼女は半袖の上からひざ掛けを はおりながら何かを探している。明らかにもう非常事態だった。

この状況を見てしまった私は、とうとう・・・

私「もしよろしければ何かお手伝いしましょうか？」

指導者の血が騒いでしまった。

彼「あっ、はい、ありがとうございます」

「助かった～」といった表情で微笑んだ。そしてモノを見てみるとS社製の小型のドームテントだった。聞けばやはりこれは知人からの借り物で、立て方が分からずに電話で相談していたが、ポール、フライ、インナーなどといった単語も分からないので電話での説明に苦戦していたとのこと。

持ち物についても聞けば、服は半袖、短パンの替えと、このテントのみ。食料はコンビニ弁当。どうやらテントと食料さえあれば何とかかなると思ったらしい。

私「・・・(-_-)」

私は言葉が出なかったが、暗い中何とかテントを設営し、ランタンとライトそして彼には大きめのブランケット、そして彼女の方には同じくブランケットと予備で持っていたダウンジャケットを貸し、そして今日は時間も遅いのでこちらで夕食を食べてもらった。

そこで彼らにキャンプの楽しさや自然の恐ろしさ、軽装備がいかに危険かなどを話すと、さすがに今回は無謀すぎたと少し反省したらしい。ここまでは私主導で話が進んでいたのだが、だんだんと彼主導になっていく。

そしてここで彼の逆襲が始まった！

「寝袋はどんな形がいいですか？」

「防寒対策は他に何かありますか？」

「オススメはやはりダウンですか？」

から始まり、

「テントの種類はどんな・・・」

「テーブルとチェアはセットの方が・・・」

「ランタンはガスとガソリンどちらが・・・」

とか、

「どこかいキャンプ場って・・・」

「スモークチーズの温度は・・・」

そして最後には

「倒木してから薪（まき）にするまでどれくらい乾燥させれば・・・」
など、いつの間にかかなりマニアックな話が朝まで延々と続いた。
もうヘトヘトだった。

そして、翌日・・・

「私、これを機にキャンプを始めてみようかと思ひまして」

また友達が増えた。嬉しい瞬間だった。